
ダウンロード

深々

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ダウンロード

【Nコード】

N4595K

【作者名】

深々

【あらすじ】

音楽プレイヤーから流れる音楽によって、能力を使う能力者たちが戦う話。近未来というかファンタジーというかバトルみたいな感じ(?)。

序章

世界は常に進化している。

進化に限りなど存在しない。

世界を進化させるのは常に人だ

「ん？なんだこれ？説明書にはこんなこと書いてないけど・・・？
？？」

MMPから映し出されている立体映像には、こう書かれていた。

こんにちは、この世界の未来を担う子供たちの一人よ。

いきなりメールが来て、驚いてるかもしれないが、

是非、よろこんでくれ。

君は、選ばれたのだから。

君は、進化することを許された人間の一人になったのだよ。

君に、ある力を授けよう。

その力で、世界を進化させて欲しい。

私は何もできないので、影ながら見守らせてもらおうよ。

健闘を祈る。

p . s

このメールのことは誰にも言わないで欲しい。
なぜなら、君の力に皆が嫉妬してしまうかもしれないからね。

そして、もう一度言うよ。

君は、選ばれた人間だ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・イタズラか・・・」

たっぷり5分かけてそのメールを読んだ。

だけど、イタズラとしか思えなかった。とりあえず友人に、この
イタズラメールのことを相談しようと思い、携帯を出した時。

ポオン

MMPがメールを受信した。

そのメールには一文と、サイトのURLとMp3型の音楽データ
が入っていた。

「これは私からのプレゼントだ。」

ファイル名：Wind

種類：MPEG Layer 3 Audio

サイズ：10MB

「ん？・・・プレゼントって・・・怪しいな。消すか。」

ポオン

そのメールとデータを削除しようとした瞬間、MMPの画面がメール受信画面に変わった。

メールを受信しました。

MMPから電子音が流れる。

「なんだ？なんだ？今度はなんだって言うんだよ。」

ちよつと。ちよつと。信じてよ！いきなり消そうだななんてひどいよ〜（泣）君は進化できる、って言ってるんだよ！？喜ばうよ！

「……え？なんでいきなり（泣）とか使ってたよ……てか何で俺が消そうとしたことが……？」

ポオン

そんな疑問に答えるかのようにまたメールが送られてきた。

見てるからね。

「!?!?!?!?!す、ストーリー!?で、でもストーリーにしては変な内容だし……はっ！もしかして電波ストーリー!?」

ポオン

違うから!!なんでそうなるかな?とにかく信じて、一回ためして見てよ。サイト送ったでしょ?それ見て。

「……試す、とか……ウイルス入ってたらどうすんだよ……」

ポオン

「!?!?……や、やればいいんだろ……」

そして、送られてきたURLをクリックしてサイトに飛ぶと、そのサイトのトップにはこう書かれていた。

世界をかえる力を与えよう

そしてその言葉の下に“Enter”と書かれていた。

「……あっ、そうだ明日の宿題やんなきゃ……」

ポオン

「……やればいいんだろ……」

序章（後書き）

頑張って（？）いきたいと思います。

1話

「……機械が苦手だから。なんて言い訳はもう通用しません。なぜなら、この新型音楽プレイヤー My Music Player。略して M M P には複雑な操作は全くありません。そして、画面も立体映像ホログラムで再生されるため、お年寄りの方で、「字が小さくて見えな

い。」なんて思ってる方でも、見やすく使いやすい！そして、そして、今回出たこの新色は……」

街の高層ビルのスクリーンに映し出されている C M。それは最近、世の中の若者の間で広まっている、新型の音楽プレイヤー。M M P (My Music Player)。C M の通り、現代科学の最新の技術が使われており、今年になって世間で広まり始めた、立体映像の技術が使われている。高価な物かと思われがちだが、実際はそんなに高いものではなく、一世代前の I p o d と同じ程度の価格で販売されているため、学生の間で大人気だ。

実際に立体映像の技術がフルに活用されているのは、この M M P くらいだろう。T V などを立体映像にすると、確かにスペースをとらずにすむが、どのみち映像が出ている時のスペースは必要になるため、それほど魅力的ではない。それにくらべ M M P は本体のサイズが 3 x 5 c m の片手に収まる大きさにもかかわらず、立体映像の大きさは 15 x 10 c m ほどの大きさで、かなり見やすくなっている。そして何よりイヤホン、ヘッドフォンと本体の間にケーブルがなく無線だ。イヤホンのように小さいものはなくなり易いため、かなり安価で売られている。

だから、学校での話題は M M P で持ちきりだった。そして、自分分の手の中には新型の M M P がある。新色で、青色がベースになっ

ていてその上に白色で、まるで雲のような模様が入っているやつだった。

貯めていた小遣いでそれを買い、明日、それを友達に自慢してやるうと思いつつ、ボーっと明日のことを考えていたら・・・

ドンッ

「きゃっ!」

ボーっと歩いていたため、誰かと正面からぶつかってしまったようだ。声からして女の子だろうと思う。ぶつかった感覚からして、向こうもボーっと歩いていたのだろう。

「あつ、すみません。大丈夫ですか？」

とりあえず、謝っておかなくてはいけないと思い、自分の前でもちをついてしまっている女の子に声をかける。

「あつ。い、いえ、こちらこそすみません。私も少し余所見をしていたもので・・・」

そういつて彼女は立ち上がりお尻をパンパンと払いながらこちらに頭をさげてくる。静かそうな雰囲気、いかにも押しが弱そうな感じだった。しかし、何より目立ったのはその前髪の長さだった。目を完全に隠すほどにまで長かった。そのせいで歳がわかりずらかったが、着ていた制服で高校生であることはわかった。

「ど、どうしたんでしょうか？私の顔に何かついてますか？」

ジッと顔を見ていたので、不思議に思われてしまったようだった。

とりあえず、何か言わねばと思い、

「あ。いえいえなんでもないんです。・・・き、綺麗な人だなと思
って・・・あは、あははは。」

曖昧に笑いながら、言つて後悔する。初対面の人にいきなり綺麗
はないだろうに、これじゃあナンパと勘違いされそうだ、しかも前
髪で顔が見えなくて、綺麗かどうかなんてわからないのに。つい、
「女性に対しては、とにかくお世辞。」と日頃から友人から言われ
ていたため、ついこんな言葉が。

「き、綺麗だなんて・・・え、えと、えつと・・・」

そして彼女の方はなぜか言葉を本気にしてしまい顔を真っ赤にし
て俯いてしまった。褒められなれてないんあるうか。普段ならこん
なことはしないんだが、こう咄嗟にだと言葉がうまく出てこなかっ
た。

「す、すいませんいきなり。じ、自分はこれで・・・え、えと、
さっきはぶつかつてすいませんでした。」

そう言つて逃げるようにその場を去つた。その後も彼女がその場
で顔を真っ赤にしてボーっと立っていることも知らずに。

2話

「おーっす」

「よお」

軽い朝の挨拶をしながら、学生たちが靴を履き替えて、校舎に入っていく。

「霧月！。おっはよー！」

そう言っただけ　山崎大和は軽く背中をたたいてきた。

「ん？おあ、おはよう、大和。」

何気ない朝の挨拶。だが、大和はこちらの変化に気がついたようだった。

「んん？どうした？なんかいい事でもあったのか？」

「あ。わかる？・・・まあ後で話すよ。」

ハハハと笑いつつ、彼と一緒に教室へ入り自分の席に座る。大和も後ろの席に座り、こちらが話すを待つかのように、ジッとこっちを見てくる。

「そう、せかすなつて。別に大したことじゃないんだけどさ。」

「普段からヘラヘラしてるお前が、いつになくニヤついてんだよ。大したことがあったんだろ？・・・ほら。ニヤつくの堪えてるの

「バれてんぞ。」

「あ、バれてた?。」

ハハハと笑いつつ、もう我慢できないとばかりに制服のポケットに手をいれて、中にある物を掴み出して、大和の目の前に掲げた。

「ジャーン! ついに買ったぜ! MMP! ハッハッハ。」

「おお! やつと買ったか! これで一緒にDHができるな! もちろんDHはもうダウンロードしたんだろっな?。」

そう言いながら彼もズボンのポケットからMMPを取り出した。

「あつたりまえジャーン! そのかわり曲はまだ一曲も入れてないけどね。」

DH。ドラゴンハンターは今、若者の間で大人気のゲームだ。大和はDHをかなりやり込んでいて、常に早くMMPを買えと言っていたのだった。

そして、昔とは違い、今は、音楽を聴くだけでなく、本格的なゲームやネットなどとMMPでなんでもできるようになっていた。つい最近まで、小型ゲーム機を使っていたので、DHのようなMMP専用のダウンロード型のゲームはできなかったが、それも昨日までだ。

「そうか。そうか。じゃあ、今日俺ん家来いよ。俺がDHの初心者講座を……。」

キーンコーンカーンコーン

大和の言葉をさえぎるようにチャイムが鳴った。それと同時に他

の席でしゃつべっていた生徒は自分の席に戻りだす。

そして、ガラッと教室のドアが開き教師が入ってきた。

「おーし。皆、席につけよー。よーし、じゃあHRをはじめるぞー。」

教室に入ってきたのは担任の教師で、体育の教師もしている高山という教師だ。

「起立。礼」

そう言って委員長がいつものように号令をかけてHRがはじまった。

いつも通りに授業が終り、皆が帰り支度を始めたとき、高山が教室に入ってきた。

「皆、ちょっと聞いてくれないか。」

いつになく高山は真剣な顔をしていた。

「。最近ここらで、よく事件が起こっているのは知っているな？」

そう、最近よくニュースになっている事件がある。つい昨日まで普通だった人間が突如、植物人間になってしまう。という事件だった。はじめの事件が起きてから、何度も同じことがおきるため、同一犯の犯行ではないかと思われる。どの人も、昼にフラツとい

なくなつたと思えば、夜に公園や路上で倒れている所を発見されているため、拉致されてなんらかの薬を飲まされたのではないかと考えられているのだが、被害者のからだからは薬物の反応は全くでなくて、事件は謎につつまれたままだった。

「どうも、昏間に拉致されているらしく、その上被害者は皆、高校生だ。」

一番の問題はそこだった。犯人は高校生ばかりを狙っているのだ。いままでの事件はすべて高校生が被害にあっていた。

「だから皆も、帰りは一人では帰らないように。それじゃあ帰っていいぞ。」

その言葉を聞いて、皆が帰りだした。

「よし。俺らも帰ろうぜ。」

「おう。直接俺の家に来るか？」

3話

「あ、そう言えばさ大和。MMP買った時ってさなんかメールきたりした？」

自分のMMPを操作しながら大和が顔をあげてこちらを見た。

「ん？来たよ。ご購入ありがとうございます的なのが・・・それがどうしたんだ？」

「1件だけ？」

「当たり前だろ。」

「だ、だよな・・・はは、はははは」

大和はいぶかしげな顔をしていたが、曖昧に笑って誤魔化した。

（買った人全員、てわけじゃないのか。）

「そんなことより早くDHやろうぜ。」

大和が自分のMMPを持ち上げて言う。

「お、おう」

そのまま2時間ほど大和の家でDHをしたあと、大和の家を出て帰路についた。

慣れた帰り道を歩いていると、どうしても考えてしまうことがあ

る。例のメールの事だ。

あの後結局、例のURLからとんだサイトを調べた。やはり信じがたいことばかりが書いてあった。

その内容を簡潔に話せば、“敵を倒して強くなり、世界を進化させてください”だ。

正直サツパリだった。まるでDHみたいなゲームのような内容だった。

ただゲームと違う点は、相手が人で、戦うのは自身であり、武器はMMPにダウンロードされている曲を使った超能力。

変なことには首を突っ込みたくなかったので、やる気なんてなかったが、そのたんびに例のやつからメールがくるのだ。

結局、そのサイト通りに会員登録をすませ、指定の曲をダウンロードした。

曲名：Wind lv1 defend・windwall

種類：MPEG Layer3 Audio

サイズ：10MB

曲名：Physical avoid lv1

種類：MPEG Layer3 Audio

サイズ：10MB

指定された曲はこの2つだった。それを言われた通りに自分のMPの音楽フォルダにダウンロードした。

曲を再生すると、フォルダに入っていた全ての曲が同時に再生された。しかし、何故かそれらを聞き取ることができた。

そして肝心の超能力の使い方が、“聞くと使える”としかサイトには書いていなかった。なんのボタン操作もいらぬらしい。

しかし、聞いていても何もおきなかった。やはり、嘘だとは思えなかった。

大和の家から自分の家までは歩いてほしい10分ほどの距離だし、しばらく歩きながら例の事について考えていたが、結局何もわからないままだった。

「ただいま。」

返事を返してくれる者がいないことを知っていたながらも、どうしても癖で言ってしまう。

自分の部屋まで行き、パソコンの電源を入れる。いくらMMPでネットが使えるからといっても、やはり電池の消費量が半端ないし、何より立体映像には慣れていない。

そして、例のサイトのURLを入力し、もう一度サイトを見る。

カタカタ

前調べた時は、使い方のとこばかりを見ていたので、今回は違うところを調べてみた。

そこで気になったことがあった。

「・・・これは・・・どういうことだ？会員数215名・・・他にも俺みたいなメールを貰った人がいるのか・・・」

そして、会員の一覧表を見つけた。

「・・・なんだこれ？ほとんどの人の名前が“NONmae”じゃないか・・・ん？名前の横のこれは・・・なんだ？」

Name : Job : Level

Noname:Fighter:1
Noname:Fighter:1
Kouta:Wizard:3

左から名前、職、レベルとなっている。

「Fighter・・・戦士のことか？Wizardは魔法使いだ
るうな・・・本当にゲームみたいじゃないか。レベルなんてあるあ
たりがもう・・・ん？このKoutaって奴、名前んところが暗くな
ってるな・・・」

他の人も何人が暗くなっていた。

「ログインしてるかしてないか・・・なのかな？」

そのので自分の名前を探そうと思い、気がついた。

「名前登録してないな・・・てかそんなの会員登録と一緒にしとけ
よ・・・」

ぼやきながら、ログインをして、自分のプロフィールを探す。
ちなみに、最近のサイトのログインは指紋認証になっている。
そうして、自らのプロフィールを見つけ、表示する。

4話

名前：NOName

職業：Knight Magician

LV：1

「ふーん。こんなけしかないのか。名前変更しかできないわけね・・・名前ね・・・」

いきなり名前といられても、本名を使うのはどうかと思うんだけど・・・

「まあ・・・なんでもいいか。」

カタカタ

名前：KAIRI

職業：Knight Magician

LV：1

「・・・まあ、本名でも関係ないと思うし・・・」

そして、プロフィールには入力した名前が表示された。するとさつきまで“プロフィール変更”とかかれていたボタンが“詳しい説明”となっていた。

「どどういうことだ？名前を入れなきゃ見れないようになってたのか？」

まよわずそのボタンをクリックしてみる。すると、以下のようなことが書かれていた。

君たちは選ばれた人間だ。

「・・・また、このくだりか・・・」

名前入力をしたということは、よりこのことに興味をもつた、ということと解釈させてもらうよ。

「やっぱり、名前入れなきゃ詳しいことはわかんなかったわけだ。」

まずは能力の使い方について

曲を再生すると、普通の曲とは違って、このサイトからダウンロードした曲は、どの曲を再生しても一斉に再生されるようになっていきます。

そして、このサイトで入力した名前をその能力の発動時のパスワードとします。(名前の変更はできません)

曲を再生してる間に、能力をイメージし、パスワードを言葉にしてください。

そのあと脳内で機械音声によってプログラムが作動が確認されましたら、魔法系統なら魔法名を、それ以外なら、機械音声の流れ終わった後に自動で発動されます。

「ほー。名前がキーなのか・・・てか脳内って・・・俺、頭イジられてんのかな？」

注意事項

能力は曲の再生時間、つまり最大で10分間だけ連続で使用するこ

とができます。

そして、能力を使える場所はこの能力の使える曲がダウンロードされたMMP2つ以上がある時のみです。そして、その2つが100m以内で存在していなければなりません。

「つまり街中で片っ端から試せつてことか？そんなんしたら普通にこれバレルじゃん」

次に、職業について

F a g h t e r . . . 戦士

身体能力増加系、武器生成系のふたつを使うことができます。

W i z a r d . . . 魔法使い

火・水・風・土の4種類の魔法を使うことができます。

H e a l e r . . . 聖職者

回復系、その他の特殊なスキルを使うことができます。

このように3つの職業、タイプがありそれぞれどれかの職についています。(職業はランダムで決まります。)

ですが稀にK n i g h t M a g i c i a n魔法騎士やB i s h o p司教、P a l l a d e n聖騎士などの2つの職を合わせた力をもつ人もいます。

「俺は . . . K n i g h t M a g i c i a nか . . . これは喜んでいいのか？」

そして戦いについて

一人の能力者が能力を発動させると、一定範囲内いる他の能力者のMMPにメールが入るようになっていきます。そのメールで戦闘に参加するかどうか選択をし、最初に“はい”のボタンを押した者と戦闘が始まります。

戦闘時はそれぞれにHPとMPが存在しています。その値は特殊系

その画面にはこう書かれていた。

近くで能力の発動が確認されました。

対戦者名：K o t o n e

戦闘に参加しますか？

“ はい ” “ いいえ ”

「これは・・・確かめるといつてるのか？・・・」

タイミングがよすぎるメールに怯えながら、画面をタッチした。

5話

まさかとは思った。やっぱり嘘だと思っていた。
だから、あの時興味半分で“はい”を押したんだ。

体が軽くなるイメージをする。そしてパスワードを口に出す。

「か、KAIRI!」

< Mode / Fighter . . . Tipe / Physical
P . avoid . Lv1 . . . OK . . . Start >

頭の中で聞こえる機械音声。

そして、途端に体が軽くなる。

「まじかよ . . . 本当に体がるく . . .」

「ファイアボール!」

能力の発動を確認する間もなく、真正面から火の玉が発射された。

「なっ!?! . . . うわっ!」

能力が上がった身体能力でかるうじて避ける。まさか本当にこんなことになるとは。

今から5分ほど前。MMPで“はい”を押した後しばらくして、またメールが受信された。

戦闘が承諾されました。以下の地図に従い、目的地に行ってください。

と、メールにはかかれていた。

「まさか俺が最初に“はい”を押したとは・・・まあ、いいか。確かめるだけだし、本当に超能力とかあるわけないしな。」

そして、学ランの上を羽織り外へと出て目的地へと向かった。そしたら・・・これだ。

「ッハ！甘いね！それでも戦士！？そんなギリギリで避けて勝てるでも思ってたの？もういっちょ・・・・・・ファイアボール！」

分かってはいるんだけど、こちらは初めて使ったばかりだということに、向こうはいたって慣れた様子。勝てるとは元より思ってもいない。

元々勝つことよりも確かめることの方が目的だから。

「試すだけ、試させてもらおうかな・・・」

今度は風の壁をイメージし、

「KAIRI。」

<Mode/Wizard・・・Tipe/Defend・Win

d w a l l . L v 1 O K . . . S t a r t >

そして、両手を向かってくる火の玉に突き出す。

まるで火の玉を両手で受け止めるかのような仕草に相手の女の子は笑い出す。

「ハハハッ。いくら戦士でも魔法を受け止めるのは無理にきまつ

- -

「ウインドウォール」

女の子が言い終わらないうちに能力を発動させる。

すると、目の前に風が巻き起こり、飛んできた火の玉をかき消した。

「なっ!?!? あんた、魔法騎士!?!」

そんな女の子の声を完全に無視して手に見入っていた。

「まさか 本当に 魔法?」

「でも、すでに2個スキルを持つてるってことは、それで全部か なら攻撃系はないってことね なら、ちよつと! あんた!」

女の子は攻撃する手をやめて、こちらに歩いてきた。

「聞きたいことがある。今は攻撃しないから話をしない? あんたが、カイリなんでしょ?」

「!?!? なんでそう思う?」

知っているはずがないのに、何故か自分のハンドルネームが知られていたことに驚きながらたずねる。

「質問してるのはこつちなんだけどねー。ついさつき“Noname”だったものが“KAIRI”に変わった。そして、魔法戦士は今のところこのカイリって奴だけだ。それで今、目の前で身体強化と魔法が使われた・・・なら、必然とあんたがカイリになる。どうよ？違う？」

なるほど、と思う。Knight Magicianは今のご自分だけということだ。

「ああ、そうだよ。俺がカイリだ。・・・それで、なんで攻撃をやめたんだ？」

「ふん。やっぱりね。・・・あんたはさつきこのルールを知ったとこだろっ？なら、これがはじめての戦闘だ。ということはもちろんLv1。つまり使える曲は始めの2曲のみ。そして、あんたはさつき2つ使った。筋力ではなく回避力、そして防御系魔法。ということ、攻撃系がない。つまり、あたしを倒すことは無理だ、ということ。だから、交渉しにきた。」

つまりは、Lv1である間は使える能力はたたの2つ。そして自分は今2つ能力を使った。よってこちらには攻撃手段がないと思ひ、話しかけてきた、と。

「まあ。魔法戦士は今のとこあんただけだし、かなり珍しいから戦力にもなるだろうと思うからさ。あんた、あたしと手を組まない？」

「俺とパーティーを組めと？」

「そう、話が早いね。いい話だとは思わない？あたしはあんたより戦い慣れてる。だからあんたのMPをこの距離で壊すこともできる。つまりあんたは今、あたしとパーティー組めば、植物人間にならずにすむ、というわけよ。どう？」

「なるほど。話は分かった。．．．だけども、一つ間違ってるよ。
俺は．．．．．」
「ん？」

そう言いながら、頭のなかで風の刃を思い浮かべる。

「KAIRI。」

下を向きながら、ボソッと言う。

<Mode/Wizard．．．Tipe/Attack．win
d cutter．Lv1．．．OK．．．Start>

そして、？マークを頭に浮かべてる女の子に向かってニコリと笑
いながら言った。

「ウィンドカッター」

6話

「な、なんで？3つも使えるはずなのに・・・」

そう言いながら、自分の目しりもちをついている女の子はこちらを睨んできた。

「騙したわね・・・」

「騙してなんかないから。元々、手を組むとも言ってないし。まあ3つ使えるのは俺自身も謎なんだけどね・・・」

あの近距離で風の刃を避けるのは無理なため、女の子はとっさに火の壁を作ったが、出来上がる前に風の刃がきてしまったため、目の前で火の壁の出来損ないとぶつかり爆発してしまい、吹き飛んでしまったのだ。そして、そんな女の子を見下ろしながら、

「そんなことより・・・君、俺と手を組まないか？まあ、この距離ならいきなり火の玉来ても避けられるし、ウィンドカッターなら君のMMPを壊せる。どう？悪い話じゃないと思うけど？」

それを聞いた女の子は、またまた頭の上に？マークを浮かべてこちらを見上げた。

「は？何言ってるの？さっき思いつきり攻撃して、あたしと手を組まないって・・・」

「誰も手を組まないなんて言っていないって。」

「・・・意味わかんない。」

そりゃそうだ。交渉を持ちかけた相手に攻撃され、立場が逆転し

た時に何故、こちらが交渉を持ちかけられたのか。

「いや。ただ、上から目線はどうも気に入らなくてね。で、どう？」
「はは、ははははははは。」

突如女の子は腹を抱えて笑い出した。

「何？もしかしてそんな理由であたしは攻撃されたの？くくく。いいよ。手を組むよ。相当変わった奴だね、あんた。まあ、いきなり女の子に攻撃したことは許さないけど。」

「君なら避けれるだろ？あれくらい。だからやったんだよ。まさか吹っ飛ぶとは思わなかったけど。俺的にはその『あんた』とか『お前』とか呼ばれたくないから、こういうことしたのに呼び方は変わらないのか。」

はあくどと落ち込みつつ。自分と同じくらいの歳の子を見下ろしているど、

「名前も知らない人をなんて呼べってんのよ。・・・よつと。」

女の子は立ち上がり、スカートについた砂を払い落としながら、ポケットからMMPを取り出した。

「あんたも・・・つて、『あんた』って嫌なんだっけ？じゃあ、先に名前教えてくれる？」

「おお不良少女が改心し始めた。」

「誰が不良だ。ちよつと言葉遣いが汚いだけだろ。で、名前は？」

「名乗るのは普通自分からだろう？」

女の子がイラッときたのを見て、内心にやけてる自分。昔から人

を怒らすのだけは得意だった。

「……咲崎琴音」

「……ブツ」

思わず吹いてしまった。さっきまでの口の悪さ、いきなり攻撃をする性格と名前とのギャップに耐えられなかったのだ。

「何笑ってんの！ さっさと名前言いなよ！」

「ゴメン。ゴメン。つい、ギャップの大きさに……ブツ」

「……いいから早く言いなよ。話が進まないでしょう！」

「クククク。えっと、俺は霧月海璃。16歳で高校1年生です。」

よろしくと言わんばかりに手を差し出すと、思いつきり嫌そうな顔をしながら女の子はその手を握りかえしてきた。

「……高1か……あたしは高2だから。これなら上から目線でも構わないんじゃない？ なんせ歳上なんだから。なあカイリ君。」

「歳とか関係ないから。次上から目線で話し出したら、水色の縞々つて呼ぶから……それとその『君』づけの呼び方、合っていないよ。」

「……て、てめえ……」

プルプル震えながら不良少女こと咲崎琴音は全身から怒りのオーラを出しまくっていた。

「『てめえ』とかダメだから、この水色の縞々の不良少女よ。」

「いつペン殺す！ 絶対に殺す！ いつ見たんだ！ さっきか？ さっきなのか！？ もしかしてそのために攻撃してきたんじゃないだろうな！？」

堪忍袋の緒が切れたのか、琴音は騒ぎ出した。

「ほらほら。また口調が、殺すとか女の子が言う言葉じゃないでしょうに。・・・そんなことよりパーティーでどやって組むの？」

そんなこちらの言葉を完全に無視して琴音は掴み掛かってきた。一つ年上といえど、所詮女の子。いくらこちらが平均より背が低いと言えど、男の子。負けるはずもなく、つかんできた手をひねり上げる。

「いた、痛い痛い！ギ、ギブ！」

そう言っ、掴んでいた手の腕をペシペシ叩いてきたので、離してやり、

「そんなことより、パーティー」

「分かってるよ！ちゃんとした言葉遣いでしゃべるから、そっちも変な名前で呼ぶなよ・・・あと、水色の縞々は忘れる。」

キツとこちら睨み、自分が頷いたのを見て、話しをつづけた。

「パーティーはMMPのこのボタンを押して、それで」

こうやって初めての戦いはドロに終わり、パーティーを組むこととなった。

7話

パーティーについて

パーティーは2人以上の人間で組むことができます。パーティーでは共闘することが可能となり、断然敵に対して有利になります。最大4人まで組むことができます。パーティーでは互いの魔法合わせ、合体魔法を使うことが可能となります。

「ふーん。パーティーって便利だな。」

琴音と海璃は戦闘が終わった後、海璃の家のパソコンを使って、パーティーのことに詳しく調べていた。

「あんだ、本当に何にも知らないくせに戦闘したのね。」

はあ。と呆れ口調で琴音が言うと、

「そんな俺に負けたのはどこのどいつだよ。あと・・・呼び方、戻ってるぞ。縞パン野郎。」

「っ!?!?・・・悪かったわよ。謝るからその・・・呼び方やめて。」

「呼び方?水色の縞々野郎のこと?」

「・・・ちよっと・・・なんか悪くなってんじゃないのよ。」

キツと睨む琴音の怒りをスルーしながら、

「そんなことより、この“合体魔法”って何?」

パソコンの画面の文字を指で指しながら、琴音に向かって質問を

投げかける。

「人の話を……もう、いい。……合体魔法はあたしもあんまり知らない。調べれば分かるとおもっけど……」

カチカチ

慣れた様子で、琴音がマウスを動かす。

「えーっと。確かこちら辺に似たようなことが……あった。」

こちらを振り返り、画面を指差す。

属性について

属性は、火、水、風、土とあります。

ただし、使える種類は限られています。初めに使った属性があなたの属性となります。

たとえば、初めの属性、つまりあなたの属性が火なら、水は使うことができない、ということですよ。

しかし、例外があります。

風や土は特殊な属性のため、この2つのうちどちらかの属性ならば、2つの属性を使うことができます。

「あれ？俺って風じゃない？なんか職といい属性といい、レアだな……」

「いいから続き読んで。」

そして、風か土の場合は2つ目の属性が火か水のどちらかとなります。

つまり、火、水、火と風or土、水と風or土、となります。

次に、属性ごとの特性について

火は他の属性に比べて、攻撃重視の能力となり、より早く強い能力を使うことができます。

水は他の属性に比べて、防御重視の能力となります。

そして、特殊な属性の一つである、

風は属性変化の特性があります。

風＋火⇨雷。風＋水⇨氷。となっています。

もう一つの特異な属性である、

土は能力増加の効果があります。土と掛け合わせることによって、能力の威力があがります。

「俺の能力・・・かなりレアだな。」

「確かに、あなたかなり恵まれてる能力ね・・・」

属性の相性について

水 火、火 氷、氷 風、風 土、土 雷、雷 水。となっ
ています。

武器単体場合は無属性となり、有利不利はありません。

「武器?・・・武器って何だ?鉄パイプとか釘バット使っ
て戦え
ることか?」

「んなわけないでしょ。海璃は魔法騎士、つまり戦士でも
あるんだ
からそれくらい知っときなさいよ。」

「????どゆこと?」

「はあ〜。ここ見て。」

カチカチ

琴音はマウスを動かして戦士の能力の詳細ページを開いた。

戦士の能力について

戦士の能力は大きくわけて、身体能力増加系、武器生成系の2つがあります。

まず、身体能力増加系について。

身体能力増加系は中でも攻撃力、回避力、命中力の3つがあります。

攻撃力は筋力をあげて、現実的な物理攻撃力をあげます。大剣や太刀などに向いています。

回避力は反射神経をあげ、回避を容易にできるようになります。ダガーや剣に向いています。

命中力は動体視力を上げます。弓や投げナイフに向いています。そして、武器生成系について。

これは武器を作り出す能力です。基本的に一人につき一つ生成することが可能です。

ただし、矢や投げナイフなど消耗品はほぼ無限です。

「ふーん。じゃあ俺もなんか生成できるのか・・・」

基本は、身体能力系と武器生成系のスキルを一つずつ使うことができます。

「まあ、海璃はまだLv1だから武器はまだけどね。」

「・・・そう言えばさ、琴音ってLvいくらなんだ？」

「・・・そんなのも知らないであたしと戦ったんだ・・・まあ、負けてしまった以上何も言えないけど・・・Lv3よ。」

Lv3。それはつまりLv1の時よりも多くの魔法を使えることを意味し圧倒的にこちらよりも戦闘経験があるということだ。

「Lv3つて、魔法いくつ使えるんだ？」

「あたしが今使えるのは4つ。Lvが1増えるたびに1つつつ増える。」

「Lv1の時に2つ。それ以降では毎Lvごとに1つの能力を得る。Lvといえはもう一つ気になることがある。」

「なあ。Lvつて一体いくらまであるんだ？」

当然の疑問。何処が最高Lvなのか、それによって1Lvの大きさが変わってくる。

「わからない。Lv10かもしれないしLv100かもしれない。そんなのわかんないわよ。」

「んー。そもそもこうやって戦うことの意味すらわかんないしなー。確かにね、でも……」

そう言つて、琴音は立ち上がり、ウーンと両手を上にあげて伸びをする。

「ふう。そんなのどうだつていいじゃない。こんな力が使えるんだから、それだけで十分よ。後は適当に強い仲間集めて早いところLv上げればいいのよ。」

「？Lvあげて何になるんだ？」

「そっちの方が強い魔法つかえるなら、そうするのが普通でしょ。」

「……そんなもんかな？……」

そうやって答えのない問題について戸惑っていた時。

ポオン

MMPがメールを受信した。

7話（後書き）

なんとなく口調がおかしくなってる気がWWW

8話

ポオン

MMPがメールを受信した。どうやら、2人とも来ていたようだ。お互いに顔を見合わせながら、メール画面を開く。

「やあ。このメールを見てくれているということは能力を使っているのかい？」

「ここで発表だ。」

「今、この能力を使うことができる人間は256人。」

「そして残念にもMMPを壊され、目覚めぬ生きる屍となってしまった人間はこの中の13名だ。」

「能力者はまだまだ増え続けるよ。」

「そろそろこの能力について疑問を持ち始めた頃だろうと思ってね。そのことについて教えようと思うんだ。」

「私は最初に君たちに『進化して』欲しいと言ったのを覚えているかい？」

「私の目的はね、君たちに、この世界を未来へ導く存在になって欲しいと思ってるんだ。」

「この腐った世界を正しい方向へ導いてくれる先導者にね。」

「君たちには自分たちが“特別”ということを認識してもらいたくないんだ。」

「そのための能力なんだよ。」

「ほっほう。コレハキョウミブカイ。」

「嘘つきなさい。棒読みになってるわよ。」

まあ、今の君たちに言っても実感が無いのはわかる。でもそのうち分かるようになる日がくるよ。私たちはこの世界をどうにかしたい。そのため君たちに協力して欲しい。かわりにこの“能力”を私たちは提供しよう。

メールにはそう書かれていた。

「256人って結構いるんだな。……生きる屍か……それって植物人間のことが……？」

そんなことも知らなかったのか。というような目線を投げかけてきながら琴音は答える。

「そうよ。最近こちら辺で話題になっている事件はMMPを壊された人間。」

「それにしても、あの事件。確か被害者13人だよな？全員こちら辺の人間じゃないか。」

「それが疑問なのよ。どうも能力者はこちら辺にだけいるみたい。」

何故この町なのか。なんの特徴もないこの町に何故……。

「植物人間になってしまふのは本当みたいだな……。できれば戦うべきなんかじゃないんだろうけど、そうもいかないんだろうな。実際にこんな力を手に入れてしまったら……。」

「まあ、どうもこの能力使えるのあたし達みたいなの若い人だし、使いたくなるのは必然でしょ。」

「確かにな……。それにしてもMMPが壊れたら植物人間になっちゃうのか……。」

海璃は考えるようにして下を向いた。

「何？ビビっての？」

そんな琴音のからかうような言葉を耳に入らないかのように海璃は下を向いて何かを考えていた。

「……植物人間……か……あ、そういうば。」

そう言って海璃は部屋についている時計を見上げる。

「もうこんな時間だ。そろそろ帰らないと親が心配するんじゃないのか？」

時計の針は8時をさしていて、外も暗くなっていた。

「あ。ほんとだ。そうね。」

そこで、琴音はふと疑問に思ったことを口に出してみる。

「海璃の親は？この家、他に誰もいないようだけど……」

「なんだ？お茶でも出して欲しかったのか？」

「いや、違うけど……旅行でも行ってるわけ？結構家広いから……一人暮らしではないでしょ？」

二人は戦闘が終わったあと海璃の家に行き、この能力について調べていた。しかし、家には2人以外に気配はない。

「今は……出かけてるんだよ。」

「海璃だけおいて？」

「なんだっていいだろ。色々あんだよ。」

「・・・そう。まあいいや。じゃ、あたしはこれで帰らせてもらうわ。」

「送っていいこうか？」

からかうようにして言う海璃に対して笑いながら琴音は言った。

「いらないうって。そんならわかるでしょ。・・・そんなことよりアドレス教えて。」

そう言って自分のMMPを取り出す。

「MMPのアドレスか？携帯じゃなくて？」

「どっちでもいいけど・・・海璃はあんまり信用できないからね！」

笑いながらそう言って琴音は自分のMMPを操作し始める。

「今日のアレ、まだ根に持ってるのかよ。」

「当たり前でしょ！ほら・・・MMP出して。」

海璃もMMPを操作し、琴音のMMPの真正面に持っていく。

「・・・はい。これでOK。まあ、なんかあったらメールして。・・・それじゃ。」

そう言って琴音は玄関へ向かう。そして、靴を履いて玄関のドアを開けたとき、振り返って言った。

「あ……それと、今日からパーティー組むんだから、ヨロシクね。海璃。」

9話

琴音とPTを組むことになった次の日。

学校が終わり、能力のことを知ろうと、さっそく琴音にメールをした。

f r o m : K A I R I

t o : K o t o n e

- - - - -

ちよつと話があるんだ。

どこか話せるとこない

か？

しばらくして返信が来た。

f r o m : K o t o n e

t o : K A I R I

- - - - -

駅前の喫茶店は？

ロールってやつ

“ロール”聞いたことがある。駅前で結構人気のある喫茶店だ。

メールで待ち合わせ時刻を決め、ロールへと向かう。

学校から歩いて15分ほどの駅。海璃は電車通学ではないので、友人と遊ぶ時くらいしか来たことはない。

ロールのドアをくぐって店内を見回す。やはり、人気店で放課後ということもあり店内は学生で賑わっていた。

店内を見渡してみると、隅っこの方に琴音が座っていた。視線が合ったので琴音が手を振ってくる。

海璃が席につくと同時に琴音が聞きだした。

「それで・・・話って何？」

「そうせかすなよ。」

そう言って手をあげてウェイターさんを呼び、アイティーを頼む。

「いや、別にたいしたことじゃないんだが・・・」

「何？・・・どうでもいいことなら帰るけど。」

「まあ待て。・・・実はな・・・」

別にといった割りに深刻な顔で話出す海璃を不思議に思ったのか、琴音は身を乗り出して話を聞こうとする。

「・・・琴音のメールってさ。絵文字ないし、文短いし・・・お前、友達とかちゃんといえるのか心配に」

ガッ

言い終わらないうちに海璃の顔面に琴音の拳がめり込んだ。

「あ、あんた。こんなことを言うためにわざわざさっ

」

顔に怒りマークをつけながら琴音が言う。

「イテテテ、まあそれは置いて。ここからが本題なんだが・・・」

「先にそれを言えよ！」

「いちいち五月蠅いぞ。そんなに注目されたいのか？」

気がつけば、周りの客がこちらを見てクスクスと笑っている。

思わず浮かせていた腰を下ろし、琴音は真っ赤になりながら言う。

「・・・あなたねえ・・・」

「『あなた』はやめろって、それで本題なんだが・・・」

琴音の怒りをスルーし、海璃は話はじめる。

「琴音と違い、能力を使うようになってまだ1日しかたっていない海璃には知識が足りなさすぎた。」

頼んでいたアイスティーが来たので、海璃はそれに口をつける。

「まず聞きたいのが、なんでこんなことさせらてるのかってこと。」

「あのメールに書いてたじゃん。“進化”するためなんですよ。」

「何言ってるの？そんな話まじめに受けてんの？バカかよ。まあ、それはどうでもいいんだけど。」

「はあ。と呆れ口調で言う海璃に対し、琴音はイラつきを隠せなかった。」

「・・・何？あたしに喧嘩売りに来たの？」

「それでだ、琴音はいつからこの能力が使えるようになったんだ？」

「人の話を聞けよ!!!」

「Lv3てことは結構前からやってるんだろ？何か知ってるんじゃないのか？」

「・・・おい。だから、人の話を」

「今は、最高で何Lvの奴がいるんだ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

全く人の話を聞こうとしない海璃に対し、ついにあきらめたのか

「あたしが始めたのは今から2週間くらい前だよ。」

「そんな前からあったのか・・・始まったのはいつごろなんだ？」

「今の最高Lvは4だから、始まったのは、2週間よりちょっと前なんじゃないの？」

「ふむ。あとはどうすればLvが上がるかなんだけど、琴音知ってるか？」

「それなりにならわかる。このことはサイトにも書かれていないからあんま自信ないんだけど。」

琴音が言った話は至って単純な話だった。

つまり、戦闘で勝ったときに貰える経験値はLv×10ポイントらしい。

琴音に言われて気づいたことだが、一度でも戦闘をした後は、サイトの自分のユーザーのところのプロフィールに経験値らしきポイントが表示され、あとどれくらいでLvが上がるかわかるようになってた。

そして、LVUPに必要な経験値は、Lv1で10。Lv2で40。Lv3で90。とまでは分かっているらしい。どうやら貰えるポイントもLv3までのしか分からないらしいが、話を聞いていると、全てのLvに当てはまるんじゃないかと思われる。

「ふん。なら俺はLv1を一人倒せばそれでOKなのか・・・」
「そゆこと。それで反対に負けた場合なんだけど、これがイマイチわかんないのよねー。」

琴音はどうやら今まで負けなしで来ていたらしい。

「まあ、それは追々考えるとして、とにかく俺はLvを上げたいんだよ。だから、対戦相手見つけたいんだけどさ。」

「なるほど。どうやって対戦相手を見つめるかあたしに聞きたいってこと?」

「そゆこと。」

「あたしが、戦ってた時は町歩きながら適当に能力を試して、使えたらそこで立ち止まって対戦相手が決まるの待ってたんだけど。」

「それである時は俺と戦うことになったのか。」

無茶苦茶だ。自分よりも強い相手が来たら、などとは考えてなかったのだろうか。

「そう。まあ、Lv1がくるとは思ってたけどね。にしても不便ね。もつと楽に対戦相手が見つかったりしないのかな。」

「Lv1がそんなことしてたら即負けるな。」

するとそれを聞いた琴音はイタズラな目をして言った。

「それで一回負けてみてよ。そうすればどうなるか分かるし。勝てれば勝てればそれでいいんだし、名案じゃない?」

「・・・俺で試すなよ。はあく。これじゃLvの上げようがないな・・・」

解決策が思い浮かばず、結局その日は普通に分かれて帰ることになった。

最後まで琴音は例の案を言っていたが、それは当然無視だ。

「とにかく戦ってLvをあげるの！」

「俺は・・・戦いたくない・・・戦いなんて、したくないんだ。なんで人は戦わなければ」

「シヤラップ！変にキャラかえてないで、ほらとつと行くよ！」

「・・・あ。そうだ、今日こそはDHの続きやらなきゃだから家に帰」

「ふん！来なさい。」

「ブッ！」

思いつきり首にリアットをくらいながら海璃はひきづられて行く。

連れて行かれた場所は人気のない公園だった。

「本当にここなのか？人の気配が全くないぞ。」

「MMPはここを指してるんだからそうなんじゃないの。」

しばらくして公園に2人組みの男がやって来た。

「あいつらが対戦相手か。なんかめっちゃ強そうじゃねーかよ。」

「いいからやるわよ！ふふふ。これで勝ったらLv4になれるんだからっ。」

今からちょうど20分ほど前、海璃と琴音は学校帰りに喫茶店で話をしていた。

実はあの後、家に帰ったら琴音からメールが来ていた。メールの

内容は、「サイト見て。なんか更新されてる。」だった。

相変わらず女の子さが全くないメールだった。

“更新”なんて、ブログじゃないんだから。と言いたくなってしまうのだが、そのおかげで色々とハッキリとしたことがあった。

「だから、海璃がLvを一つあげるには一回でも勝てばいいわけじゃない？そんであたしは後Lv3以上を二人倒せばいいわけよ。」

頼んだアイスティーのストローを口に挟んだまま琴音は言う。

「そういうわけで、とっとと対戦したいの。別に断る理由なんてないでしょ？」

更新された内容に“対戦版”というものがあり、対戦したいと思っている人がそこに書き込みをして、それをみた人が対戦を受けれるという至ってシンプルな構造のいわゆる掲示板だ。

「まてまて、最低でもLv3ってことは俺より遥かに強いだろ。そんなもんやってられるかよ。……すいませーん。アイスティーもう一つお願いします。……というわけで、先に俺のLvを上げようぜ。」

近くを通ったウェイターさんに追加のアイスティーをお願いした後、琴音に向き直り言った。

「嫌。なんで足ひっぱられなきゃなんないのよ。」

「……よく考えても見る。Lv1とLv3がどうやったらLv3×2に勝てるんだよ。」

運ばれてきたアイスティーを飲みながら、嫌とハッキリ言う琴音

に対して言い返す。

実際、ズブの素人がどうやったらLv3を二人も相手にできようか。仮にも琴音が一対一をしていたとして、自分に回ってくる敵が一体だとすると、Lv1VS Lv3・無理な話だ。

「いいじゃない。魔法騎士なんだから大丈夫。それに向こうは戦士二人。余裕余裕。」

確かに戦士は魔法使いと相性が悪い。完全に近距離戦専門の戦士にくらべ魔法使いは遠距離かつ範囲攻撃ができる。そう考えると圧倒的にこちらの方が有利なのだが・・・問題は海璃自身にあった。

「よくねーよ。これ負けたら逆に経験値かポイントかしんねーけど、下がるんだぜ。俺はLv1だから下がらないけど、お前下がるけどいいのかよ?」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

琴音はポチポチと自分のMMPの画面を触っている。

「おい。聞いてんのか?」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「おい。」

「よっしできた!」

いきなりMMPから顔こちらに向けてきた琴音に驚きながら疑問を口にする。

「何がだよ。」

「対戦場所が決まったわ。ここよ。」

そういつて琴音はMMPに表示されている地図の光っている部分を指差す。

「ちよ。待て。さっきまでの話聞いてなかったのか？俺だと無理だつて。」

「よっし。お会計は海璃に任せるから。いくよ！」

「おいっ」

最近の若者は人の話を聞かないことが多いらしい。

対戦相手は、B・BとT o - r u、という戦士二人組みだった。

「ふーん。お前らがK A I R IとK o t o n eか。まさかLv1で挑んでくるとはな笑わせるなあ。」

ハハハハと大声を上げて、二人組みのデブな方が笑いだした。

「……お前がB・Bか？」

いつもより低い声で海璃は尋ねる。

「ハハハ……あ？そうだが？」

「なるほど……B・Bはブサイクとデブからとってるわけか。」

すると、見る見る男の顔が赤くなっていく。

「……て、てめえ。Lv1のくせして言いやがるな。そんなに殺されたいのか……おい、トオル。やっちまおうぜ！！一人は足手まといだ、負けるわけねえ！」

デブな男のほうは、もう一人のそこらへんの不良みたいな顔した、トオルというやつに言った。

「ちよっ何挑発してんの!？」

「気に入らないんだな、これが。まあ余裕だろ。援助たのむぞ。」

そう言っって海璃はポケットからイヤホンを取り出し両耳につける。

ルール

まずは能力の使い方について

曲を再生すると、普通の曲とは違って、このサイトからダウンロードした曲は、どの曲を再生しても一斉に再生されるようになっていきます。

そして、このサイトで入力した名前をその能力の発動時のパスワードとします。（名前の変更はできません）

曲を再生してる間に、能力をイメージし、パスワードを言葉にしてください。

そのあと脳内で機械音声によってプログラムが作動が確認されましたら、魔法系統なら魔法名を、それ以外なら、機械音声の流れ終わった後に自動で発動されまます。

注意事項

能力は曲の再生時間、つまり最大で10分間だけ連続で使用することができません。

（そして、能力を使える場所はこの能力の使える曲がダウンロードされたMMP2つ以上がある時のみです。そして、その2つが100m以内で存在していなければなりません。）

追加事項

今回、街中にMMPを設置したため、あらゆる場所で能力を使うことが可能となりました。よって上記の（）内のルールはなくなりました。

次に、職業について

F a g h t e r . . . 戦士

身体能力増加系、武器生成系のふたつを使うことができます。

W i z a r d . . . 魔法使い

火・水・風・土の4種類の魔法を使うことができます。
Healer・・・聖職者

回復系、その他の特殊なスキルを使うことができます。
このように3つの職業、タイプがありそれぞれどれかの職についています。(職業はランダムで決まります。)

ですが稀にKnight Magician魔法騎士やBishop司教、Paladin聖騎士などの2つの職を合わせた力をもつ人もいます。

戦士の能力について

戦士の能力は大きくわけて、身体能力増加系、武器生成系の2つがあります。

まず、身体能力増加系について。

身体能力増加系は中でも攻撃力、回避力、命中力の3つがあります。

攻撃力は筋力をあげて、現実的な物理攻撃力をあげます。大剣や太刀などに向いています。

回避力は反射神経をあげ、回避を容易にできるようになります。ダガーや剣に向いています。

命中力は動体視力を上げます。弓や投げナイフに向いています。そして、武器生成系について。

これは武器を作り出す能力です。基本的に一人につき一つ生成することが可能です。

ただし、矢や投げナイフなど消耗品はほぼ無限です。

魔法使いの能力について

魔法使いは4種類の魔法を操ることができます。

そして、魔法には攻撃系、防御系、補助系と3つに分類することができます。

火の基本的な魔法を例にとると、

攻撃系：ファイアボール

防御系：ファイアウォール

補助系：ファイアエンチャント

ファイアボールは敵に向かって火の玉を飛ばす魔法です。そしてファイアウォールは目の前に火の壁をつくり攻撃を防ぐことができます。

補助系のファイアエンチャントは武器に火属性をつけることができ、追加効果で攻撃力を高めます。

聖職者について

聖職者は唯一の回復能力を使うことができます。

そして、聖職者は無条件に味方のHP、MPを知ることが出来ます。回復能力にはHPの回復、MPの回復、自然回復率の増加などがあります。

少しだけですが、聖職者は攻撃魔法も扱うことができます。属性は魔法使いの4種類のうちの1つにランダムでまります。

ただし、聖職者が風や土の属性を持っていても、それは特殊な能力とはなりません。

そして、聖職者にはもうひとつの種類があります。

ただしこちらの能力を持っている場合は、極端に聖職者としての本来の能力は少ないです。

その能力はいたって特殊で、色々なものがあります。

例としては、サイコキネシスや、テレポートなどがあります。

そして戦闘について

（一人の能力者が能力を発動させると、一定範囲内いる他の能力者のMPにメールが入るようになっていきます。そのメールで戦闘に参加するかどうか選択をし、最初に“はい”のボタンを押した者と戦闘が始まります。）

戦闘時はそれぞれにHPとMPが存在しています。その値は特殊系スキルを使わない限り相手が見ることはできません。

戦闘の勝敗はそのHPが先に0になった方の負けです。ギブアップすることも可能ですが、そうすると経験値を失うこととなります。ただしMMPを試合中に破壊された場合は使用者の脳に異常をきたす場合があります。くれぐれもMMPは大事に扱ってください

注意事項

<パーティーを組んでいない状態以外では、戦闘範囲では他の能力者は能力の使用ができません。>

今回、上記のルールは改定され、なくなりました。

追加事項

対戦板ができあがったため、上記で()となっている部分のルールはなくなりました。ただし、今回から本サイトの会員一覧の部分から対戦者を直接選びメールすることが可能となりました。

勝ち負けについて

戦闘に勝利すると一定の経験値が入るようになっていきます。

そして、倒したときに入る経験値は(Lvの数) × (10ポイント) となっています。

Lv1のプレイヤーには10ポイント。Lv2のプレイヤーには40と(Lvの数の二乗分) × (10ポイント) の値がLVPには経験値が必要となります。

そして、負けた場合は持っているポイント全てを失うこととなります。

ただしLVDOWNだけはありません。

パーティーについて

パーティーは2人以上の人間で組むことができます。

パーティーでは共闘することが可能となり、断然敵に対して有利に

なります。最大4人まで組むことができます。パーティーでは互いの魔法合わせ、合体魔法を使うことが可能となります。

属性について

属性は、火、水、風、土とあります。

ただし、使える種類は限られています。初めに使った属性があなたの属性となります。

たとえば、初めの属性、つまりあなたの属性が火なら、水は使うことができない、ということですが。

しかし、例外があります。

風や土は特殊な属性のため、この2つのうちどちらかの属性ならば、2つの属性を使うことができます。

そして、風か土の場合は2つ目の属性が火か水のどちらかとなります。

つまり、火、水、火と風or土、水と風or土、となります。

次に、属性ごとの特性について

火は他の属性に比べて、攻撃重視の能力となり、より早く強い能力を使うことができます。

水は他の属性に比べて、防御重視の能力となります。

そして、特殊な属性の一つである、

風は属性変化の特性があります。

風+火||雷。風+水||氷。となっています。

もう一つの特異な属性である、

土は能力増加の効果があります。土と掛け合わせることで、能力の威力があがります。

属性の相性について

水 火、火 氷、氷 風、風 土、土 雷、雷 水。となっていていま

す。

武器単体場合は無属性となり、有利不利はありません。

能力について

初期の段階で持っている曲は2つです。

その後、Lvが1あがるたびに1つずつダウンロードできるようになっています。

ただし、戦士は例外で、初期の能力から2つまでしか増えることはありません。

そして能力にはLvが存在します。その能力を得たLvから3Lvあがると、自動的にその能力のLvが1あがります。例として、火の魔法使いがいたとします。

初期で使える能力がファイアボールとファイアオールとします。Lv4になった時、その二つの能力のLvが1上がります。

MMPの破壊について

MMPが破壊されると、能力を使うために使われていた脳に支障がきたされる場合があります。

対戦相手のMMPを壊した場合、ペナルティはありませんが、何度も故意的に壊すようなことがあれば忠告メールを入れさせていただきます。

最重要事項

人前で魔法系や、武器生成系、回復系などの目立つ能力を使うことを禁止します。

この能力のことはあくまでも、会員に選ばれた人間のためだけのものです。

もし、街中で能力を思いつきり使ってしまった場合は、1週間以上、能力の使用を強制的に禁止させていただきます。そして、LVも一段階強制的に落とします。

LVUPして覚えた能力も強制的に消させてもらいます。

11話

「いくぞ、ゴラア!!」

そう叫んだB・Bと名乗った方の男の手から光が発せられる。そして、次の瞬間その手には斧が握られていた。

「おつらあああ!!」

叫びながら斧を振り上げて飛び掛ってくる。
海璃は冷静に体が軽くなるイメージをする。

「KAIRI」

呟く。

```
< Mode / Fighter . . . Tipe / Physical  
P . avoid . Lv1 . . . . . OK . . . Start >
```

脳内で電子音声が鳴る。

そして、体が軽くなる。

振り下ろされてくる斧の動きに体が反応する。

「ちっ。」

綺麗に斧を避けられたことに舌打ちしながら男はすぐにこちらに襲い掛かってくる。

「こっちも忘れてもらった困るんだけどねっ! ファイアボ

「ル!!」

海璃に追い討ちをかけようとしていた男に横から火の玉がせまる。

シュッ

その時、風を切る音がしたと思ったら急に火の玉が弾けた。

「なっ!?!」

琴音が驚愕に目を見張る。

するとB・Bの数メートル後ろにもう一人のトオルという男が立っていた。

そして、その手に握られていたのは鎖鎌。

「なるほど。力系の斧を使うデブの単細胞と、命中系の鎖鎌か、なかなかいい組み合わせじゃん。」

鎖鎌が火の玉を消したことに驚いた様子もなく海璃は風の刃をイメージする。

「まあ、Lv3までやってきてそれくらいしか出来ないとは、所詮その程度か・・・KAIRI」

<Mode/Wizard...Tipe/Attack・Win
d cutter.Lv1...OK...Start>

海璃の挑発にさらに激昂し、B・Bは襲い掛かってくる。

「ウィンドカッター」

風の刃が男に襲い掛かる。すかさず横から鎖鎌が飛んできてそれをかき消す。

そして、B・Bはすかさず海璃に斧を振り下ろす。

それを紙一重で避けて海璃は、男の顔面に膝を入れる。

斧の攻撃は威力は大きいですが、当たらなければ大きな隙ができる。

「ぐっ！」

呻く男にすかさず蹴り入れる。

すると横から鎖鎌がこちらの首を狙ってとんでくる。

しかし、それを軽々と避けると海璃は風の壁をイメージする。

「KAIRI」

<Mode/Wizard...Tipe/Defend·wind
wall·Lv1...OK...Start>

「ウィンドウォール！」

風の壁がB・Bとトオルの間に発生する。

「琴音！」

「はいよっ！...ファイアキャノン！」

鎖鎌が風の壁に阻まれている間に、蹴りを入れられ隙だらけの男に先ほどよりも格段に威力が上がったと思われる火の玉が襲い掛かる。

「グハッ」

男が吹っ飛んでいく。

火の玉は男に直撃したと思われた。

しかし、吹っ飛んでいった先で男が起き上がる。

「あれだけ食らって、まだ立てんのかよ。」

海璃は驚いた。蹴られた後にあれ程の威力の魔法が当たれば、もはや死んでもおかしくないと思われたからだ。その証拠に男の服は焦げて、男の皮膚からも煙が上がっている。

それにもかかわらず男は立ち上がった。しかし何故か攻撃してくる様子はない。

「あいつはこれで倒した。次はあの鎖鎌よ！」

「何？あいつまだ起き上がってるじゃないか。」

「ああいうもんなの。怪我はしても死んだりしない。よほどじゃない限り気絶もしない。ただ痛みだけがあるだけ。まあ、あれを食らったから火傷のあとくらいは残るけどね。」

してやった、といわんばかりの顔をしながら琴音は言う。

「便利だな、おい。普通アレ食らったら死ぬだろ。」

「そんなことより、来るよ！」

そう言っただけで琴音は海璃の服を掴んでバックステップをし、魔法を発動させる。

「ファイアウォール！」

目の前に火の壁ができる。その壁に鎖鎌が当たる。

トオルと呼ばれた男は、舌打ちをして鎖鎌を手元に手繰りよせ、次の攻撃に備えた。

海璃は琴音の顔に顔を近づけて耳打ちをする。

「ファイアボールをあいつに打つてくれ。それであいつが鎖鎌を使った時に、俺が突っ込んであいつの注意をひくからその間にもう1発頼む。」

琴音は目だけを鎖鎌の男に向けて海璃の話を聞いている。

「了解。突っ込むだなんて、以外と男らしいじゃん。」

「あつちが一体なら正直、避けられない気がしない。それじゃ、頼む。」

「はいはい。・・・ファイアボール！」

その声と共に海璃は男に向かって走り出す。

男は鎖鎌を投げて、琴音の手から飛んできたファイアボールを消し飛ばす。

その隙に男まで海璃は迫る。男は慌てて鎖鎌を手繰り寄せる。そして海璃は風の刃をイメージする。

「KAIRI」

< Mode / Wizard . . . Tipe / Attack . Win
d cutter . Lv1 OK . . . Start >

「ウインドカッター」

近距離で放たれた風の刃を鎖鎌で消すのは不可能と思った男は風

の刃を鎖鎌を盾にして受け止める。

「ぐっ！」

男の服のあちこちが風の刃によって破れ、頬が切れる。

耐え切ったと思った男は海璃に襲い掛かるうと防御を解いた、その時、

「ファイアキャノン！」

海璃の後ろから火の玉が男に襲い掛かる。

防御を解いていた男はその攻撃をモロに食らってしまった。

男は数メートル吹っ飛んでいった。

すると、

ポオン

MMPが鳴った。

画面には、

“ You Win ”

と書かれていた。

12話

ピピピピピ

部屋に鳴り響く目覚まし時計の音。布団から手だけを出して目覚ましを止める。

「……ん……もう朝か。」

しばらくしてからもそもそと起き上がる。

昨日遅くまで能力のことについて考えていたためあまり眠れていなかった。

その後、海璃と琴音のLvは上がった。そして、海璃と琴音はそれぞれ新しい能力をダウンロードすることが可能となった。琴音はファイアボールとファイアオールのLvが2に上がり、新しい能力は範囲魔法だった。海璃が新しく覚えた能力は武器生成だった。

「ふ、ふああああ〜」

大きく欠伸をしてから部屋から出てリビングへ向かう。

「おはよう。」

返事がないと知りながらも挨拶をする。

冷蔵庫を開き、朝飯用においてあるヨーグルトを取り出す。

「ふう。……眠いな……」

食べ終わった後のヨーグルトのカップをゴミ箱に入れて、洗面所へ

と向かう。

「……隈……できてんな……」

鏡で自分の顔を見る。夜更かしたのが一目でわかる顔つきだった。

顔を洗い、葉を磨いたあと自分の部屋へと戻る。

制服に着替えてから鞆をとり部屋をでる。

「……おっと。忘れるところだった。」

部屋の出口で止まり部屋の中へと戻る。

「……」

無言で机の上のMMPを見つめ、それを掴んでズボンのポケットへしまい込む。

そのまま玄関へと向かい、靴を履いて扉を開ける。

「……それじゃ、いってきます。」

誰もいない家に向かって言う。返ってくるのは静けさだけ。フツと自嘲気味に笑いながら家を出て学校へ向かう。

「おーっす。霧月」

「おう。」

学校へ行く途中で大和と出会い、一緒に学校へと向かう。

「最近、DHやってる？」

「あ、ゴメン。ちよっと忙しくてやってないわ。」

「ふん。まあ確かになんか眠そうだしな。」

大和と会話をしながら教室へと向かう。

そして、海璃は自分の席についてすぐに机に突っ伏す。

「大和お。先生来たら起こしてくれえ。」

「おいおい。学校きてすぐにかよ。」

海璃を見て大和は笑いながら自分の席である海璃の後ろの席へと座る。

と、そんな時。

ポオン

突然MMPが鳴った。

「グウ。」

「おい霧月。携帯・・・じゃなくてMMP鳴ってるぞ。」

「・・・グウ。」

「・・・霧月。先生来たぞ。」

「はっ！・・・て、おい。まだじゃないか。」

騙されたことで大和を睨みながら海璃は言う。

すると大和は海璃のズボンのポケットを指して言う。

「MMPにメール着てたぞ。先生来る前に見といた方がいいんじゃないか。」

ないのか？」

「メール？・・・誰だよこんな時に・・・」

海璃のMMPのアドレスを知っているのは学校では大和の他にD
H仲間だけだ。

学校に来ている今、MMPにメールなんてしないだろう。となる
と・・・

「琴音が・・・」

f r o m : K o t o n e
t o : K A I R I

- - - - -

朝っぱらかゴメン

今からこっちの学校来て！

「やっぱりか・・・」

「・・・霧月。お前、いつの間に彼女なんか・・・」

「ちげえよ。」

後ろからメールを覗き込んできた大和に笑って返す。

海璃の顔は中の中、良く言っただの上。成績はそれなりに運動神
経もそれなりだ。身長は165cmよりちよつと大きいくらいで、
高1男子にしては小さい。だからもちろんのことモテたりはしない。
それゆえ大和は海璃に女らしき人からメールが来たことが不思議で
ならないのだ。

「だって女だろ？お前が女とメールとか・・・あれ？まさかその名前
で男？」

「女だよ・・・一応な。」

こんなことを本人の前で言ったら怒ることが容易に想像でき思わず笑みを浮かべながら

「ちなみに彼女じゃない。色々あって知り合っただけだよ。」

「ふうん。まあお前が女と付き合うとは思えないけど・・・で、どこの高校なんよ?」

「えつとな・・・あ?あいつどこの高校だよ。」

高校生って言うのは知っていたが、何処の高校とまでは聞いてない。

急いでメールを打つ。

from:KAIRI

to:Kotone

.....

お前何処の学校だよ

すると間髪入れずにメールが返ってくる。

from:Kotone

to:KAIRI

.....

親咲女子高校!

早く!

「へえ〜親咲か。お嬢様学校じゃねーかよ。お前いつの間に知り合っただだよ。しかも『早く!』とか、おうおう愛されてんねー」

「彼女じゃねーよ。仕方ない・・・寝るか。」

「え?何言ってるの?行かないのか?」

「だって眠いし。」

「これ・・・かなりの急用なんじゃないのか？」

「・・・急用かもしれないな。だけど親咲まで行く気になんかならん。」

そう言っつて海璃は机にもう一度突っ伏し始める。

ポオン

f r o m : K o t o n e

t o : K A I R I I

- - - - -

早く来て！

ヤバイ！

「おい・・・『ヤバイ』とか言っつてんぞ。」

海璃のMMPを勝手に操作して、メールを見た大和が言う。

「・・・だつる。なんでこんなことしなきゃなんねーんだよ。・・・はあゝ。後、任せたからなー」

そう言っつて立ち上がり、制服を羽織りなおして鞆をとつて席を立つ。

メールからしてかなり急用そうだ。能力者関係の可能性もある。

「OKゝ任せろ。そのかわり、後で報告な〜」

変に勘違いしてる大和を無視してそのまま教室を出て行く。

13話

ここ海璃が通っている東葉高校は至って平凡な公立高校。それに比べて親咲女子高校はその名の通り女子高で、なによりお嬢様学校である事で有名な進学校である。

ここから歩いていくと大体45分ほどかかる距離にある。

「どうやって行くかな・・・あ、タクシー発見。」

大きな道路へ出たところでタクシーを見つけたので、手を上げて止まったところへ乗り込む。

「親咲女子高校の前までお願いします。」

タクシーに乗り込み運転手に行き先を伝える。すぐにタクシーは出発した。

タクシーでだいたい8分ほどで着いた。

代金を払ってタクシーを降りる。

「ここが親咲女子高校か・・・流石お嬢様学校といったところか・・・デカイな。」

校門の前で立ち止まり学校全体を眺めながらつぶやく。思えば琴音とは待ち合わせなどはしていなかった。

「あ。そうだ、メールしとくか」
「海璃！」

校門の向こうから琴音が走ってくる。

「よお。」

琴音の方から来てくれたおかげで通学中の学生から変な目線を受
けずに済んだ。

流石にこちらも学生と言えど男である以上、女子高の校門前にい
るのは不自然である。

「遅い!!」

第一声がこれだ。こちらは学校をサボってまで、しかも眠い中
きたというのにも関わらず、『遅い』とはなんて言い方だ。

「お前・・・こつちの学校からここまでどれくらいかかると思っ
たんだよ。しかもわざわざ学校サボってまで来てるんだぞ・・・何
があつたんだ？」

能力者関係だろうと思ひ、すこし緊張気味の声で言う。と、そん
な時。

「ふ〜ん。この人が琴音の彼氏か〜ほうほう。」

いきなり琴音の背後から見知らぬ女の子が現れた。

琴音と身長は同じくらいで、海璃より頭一つ小さい。特徴と言
えば、赤ぶちの眼鏡をかけてるくらいだ。

「なっ!?!だから違つて言ってるでしょ!ちよと海璃もボサつと
してないで否定してよ!」

「海璃?ほっほー。もう下の名前で呼ぶ仲ですかあ?」

「ちよっ!これにはわけが」

「わけ？どついうわけですか？・・・あやしいですねえ」

琴音とその女の子は二人で勝手に盛り上がっていた。

「・・・おい。まさかこんなことのために呼んだんじゃ」

「こんなことですよって！？あんたね、これがどついうことか分かってんの！？」

「ふふふふ。もう学校には間に合わない時間。つまりは学校をサボってまでして来たんだー君は。ふふふふ。琴音ちゃん愛されてるね。」

「違つてば！」

困った顔をしながら琴音はこちらに目を向けてくる。

「帰らせてもらつ。」

琴音たちにクルツと背を向けて海璃は道路沿いを歩いていこうとする。

「ちよつとまつたああ！！！何勝手に帰ろつとしてんの！」

琴音が海璃の服の袖を掴んで引きとめようとする。

「ああ！？帰るに決まつてるだろ！なんでこんなことに俺が付き合わなきゃなんねんだよ！」

「このことがどれだけ重大なことかわかつてんの！？」

「んなこと知るかよ・・・俺は帰る。そうでなくても眠いんだ。」

「あれあれ？なんで海璃さんはお帰りになろつとしてるんです？お姫様を向かえに来たんでは？」

そう言っただけの眼鏡っ子がこちらに歩いてくる。

「なんで俺がそんなことしなきゃなんねーんだよ。てかお前誰だよ。」

「えへへ。私ですかあ〜？親咲女子高校2年の谷口奏っています。以後お見知りおきを。」

そう言っただけ奏と名乗った女の子は眼鏡の端をクイクイと上げながら海璃のことを見ていた。

「もう帰ってもいいか？俺がここにいる理由がない。」

「ダメ！この誤解を解くのが最重要事項！！」

そう言っただけ奏は何故か校門ではなくて、道路の方へと歩き出した。

「おい。何処行くんだよ。学校、そろそろ始まるんじゃないのか？」

ただいまの時刻は8時23分。そろそろHRが始まる時刻だ。それなのに聞わず、奏は道路の方へと向かい走ってきたタクシ―を手を上げて止まらせる。

「早く来い！学校なんてそんなことよりこっちの方が大事！」

そして、啞然としている海璃の目の前を奏は歩いていった。

「え？おい……ちょっと待てよ。」

そんな海璃にかまうことなく2人はタクシ―に乗り込んでいた。

「いいから。いいから。早く来ないさつてば。」

「・・・そんな簡単に学校サボっていいものなのか・・・」

海璃曰く、能力者関係でなら学校サボってもいいらしい。

そして3人はタクシーに乗り、琴音が運転手に言った目的地へと向かった。

14話

3人が向かった先は、喫茶店ロールだった。

「おいおい。お前らの学校ってこんな簡単にサボってもいいのかよ・・・」

「そんなの海璃には関係ないでしょ」
「いやいやあるだろ」

朝ということもあって、店内にはほとんど人影がなく、3人は店の中央の席に座った。

「ほうほう お二人さん仲がよろしいようで。」

「よくない！」

「あらあら〜 息もピッタリ。」

奏の喋り方はゆっくりとしている。外見のかなりのんびりした感じからして、その話し方に違和感はないが、琴音とは正反対とまではいかないがタイプとしてはかなり違っているのにも関わらず、2人は仲がいいようだった。

「琴音と谷口さんは仲いいの？」

「ちよつと。なんで奏は苗字でさん付けなのに、あたしだけ呼び捨てなわけ？」

「え？そんなん自分より年上の人だからに決まってるだろ。」

「あたしも年上なんですけどお？」

「ああ。ゴメン。ゴメン。間違えたわ・・・精神年齢が俺よりも年上だからに決まってるだろ。」

「・・・あたしは精神年齢が低いとでも？」

そんな二人を奏は可笑しそうに眺めていた。昔から琴音は気が強く、周りの人からは敬遠されがちだった。

顔は可愛いんだけど、やはり性格が悪いのか男の噂を聞いたことは今までに一度もなかった。

なのに。そんな琴音のMMPに知らない男のアドレスが入っていたのだ。

携帯に入っていればすぐに気がついたのだけれど、まさかMMPにだけ登録して連絡をとりあっているとは思いつかなかった。

それに、やってきた男の子は気の強い琴音とうまく打ち解けているようで、それをみているとどうしても口元が緩んでしまう。

「ちよつと谷口さん。谷口さんからなんか言っちゃってくださいよ。この聞き分けの悪い、現実を見ようとしなない捻くれた人に。」

「なっ!? 誰が聞き分けが悪いですって!? あたしの何処が捻くれてるっていうの!?!」

「・・・おいおい。自覚なしってのは相当イタイぞ。」

あの琴音があんなに楽しそうに男の子と話している。

琴音が男の子と話すときは大抵が、喧嘩が始まる1歩手前なことばかり。

ついに見かねた母親が女子高に入れなければ、高校でも喧嘩ばかりしていたかもしれない。

流石に中学と高校は違う。いくら琴音でも高校の男子には適わないだろうし。

それでもやはり、ナンパしてくる男子に対して毎回のよう喧嘩を売っていた琴音がこんな会話をするなんて。

「フフフフ。」

「ちよつと! 何笑ってんの! だいたい奏が変な誤解するから!」

「だってえ。ねえ。そんなに目の前で楽しそうにされたらあ誤解もなにも、そう思っちゃうよお。」

「なっ!?!楽しくなんかしてない!」

「そうですねよ。楽しいわけではないじゃないですか。」

「・・・あんだ、口元が笑ってんじゃない!」

「おいおい『あんだ』はないだろ。いい加減に学習したらどうだ?」

「・・・て、てめえ・・・」

「はいはい琴音ちゃん抑えて抑えてえ。霧月君だっけえ?君も挑発しちゃだめよお。」

やれやれ、と海璃は琴音を挑発するのをやめ、琴音は奏に抑えられながら浮かせていた腰を下げたが、常に海璃を睨んでいた。

「せっかく琴音ちゃんに彼氏が出来たと思っただけどなあ・・・」

「いやあ。これから彼氏になる予定なんで、期待しててくださいよ、谷口さん。」

「本当!?!じゃあ私の事は今日から、奏か義姉って呼んでねえ。」

「義姉さんはちょっとアレだから・・・奏さんって呼ばせてもらいます。」

「ちよつと!何言ってるの!あんだ達」

ポオン

「!?!MMPか?」

「あらあら。お二人さんのMMPまで息がピッタリ。」

「そうなんですよお。」

「これは関係ない!」

琴音は全力で否定して、ヘラヘラと笑っている海璃を睨みまくっていた。

そして、二人は自分のMMPの画面に目線を移す。

「これは・・・」

MMPに来たメールにはこう書かれていた。

対戦者が現れました。

相手

MinMin 魔法使いLv3

Lily 魔法使いLv3

この前 対戦板にこちらのパーティーを登録し、のせておいたのだ。

対戦するにあたってパーティーの合計Lvが制限されてくる。

自分のパーティーLvの合計が、掲示板にのっているパーティーのLvの合計より高い場合は対戦することはできない。

この場合は、琴音がLv4、海璃がLv2のため、合計はLv6。そして、相手は3と3でLv6。

ちょうど同じのため、対戦が可能となる。

「ちょうどいい相手じゃない。」

「?どうしたの2人ともMMPをジッと見ちゃって。」

「いやあ。スイマセン奏さん。用事思い出しちゃって。」

「琴音ちゃんも?」

「え?あ・・・う、うん。ゴメンね奏。誤解は今度、ちゃんと解くから。」

やけに『誤解』の部分だけを強調して琴音は奏に言った。

15話

「私だけおいてけぼりかあ。二人とも用事って、偶然なの？」

「ギクツ・・・え、えつと・・・」

「もう。奏さんは野暮なこと聞くんだなあ。そんなん決まってるじゃないですか。」

「あ、そうだよねえ。」

「そうですよ。デートに決まってるじゃないですか。しかもダブルデートなんですよ。」

「はあ！？何言ってるの！メールがきてデートになるわけないでしょ！それになんてデートなんか」

そう言っつてテーブルに手を叩きつけて琴音は海璃を睨むが、

「ハハハ。何照れてるんだ？全く、琴音は可愛いやつだなあ。今日は元々これのために学校をサボるつもりだったんじゃないか。」

「なっ！？コレが照れてるように見えるわけ！？」

「そうだよお。琴音ちゃんも照れ屋さんなんだよねえ。」

「ちよつと！奏まで何を言っつて」

「じゃ行こうか、琴音。」

海璃はさりげなく自分のMMPを操作し、対戦を受けた。

「はあ！？ちよつと物事がややこしくなるような事言っつてないで、

先に誤解を

「はいはい。早くしないと遅れちゃうじゃん。」

「いつてりゃっしやい。」

海璃は誤解を解こうとする琴音を引きずってロールを出た。

2人がやってきた場所はあるビルの裏の駐車場だった。

ビルの方は長い間使われていないらしく、駐車場に車は一台もなかった。

「昨日、今日と戦ってまたすぐに戦いか。いつから俺は戦闘狂になつたんだか、なあ？ 琴音・・・」

「・・・」

同意を求めるときに琴音のほうへ視線を向けるが、その目線の先にいる本人は至って無言。

「琴音？」

「・・・」

「何？ まださっきのこと気にしてんの？」

「当たり前じゃん！」

「何を気にすることがあるんだよ。」

「何を？ 何をつてそんなん決まってるんでしょ！ なんだあしがあんたなんかと付き合ってるなんて思われなきゃいけないわけ！？」

「何？ そんな俺とじゃ嫌？ 結構傷つくんだけど・・・俺は、結構本気なんだぜ。 奏さん言った、『これから彼氏になる予定』ってのは。」

明らかにへこんでいるように見えるように海璃は地べたにしゃがみこみ下を向いてうなだれてみせる。

「え？ いや・・・あの・・・その嫌、とか・・・じゃ、なくて・・・さ。 その、なんていうか・・・海璃も嫌でしょ？ な、なんか勝手に」

「うう」

「……敵さんのお出ました」

「え？」

モジモジと顔を真っ赤にしている琴音をよそに、海璃は立ち上がり前方を指差した。

やってきた二人組みは海璃たちと同じ高校生のようだった。

この駐車場には入り口が一つしかない。

だから、2人はその入り口の真正面で待っていた。

「こんにちは」

「ども」

2人も同じ制服を着ている。しかし、その制服には見覚えがなくどこの学校かは分からなかった。

「はじめまして。MinMinさんとLilyさんであってる？」

「はい。そうですよ。私がMinMinです。あなたがKAIRIさん？」

「そうですよ。お二人も学校サボりですか？」

「エヘヘ。サボっちゃいましたあ」

「ましたあ。」

のほほんとした印象の二人。

2人とも琴音を同じくらいの身長で、MinMinと名乗ったほうはツインテールでその髪を結んでいる青いリボンが印象的だ。もう一人は片方と比べ、よりのほほんとしたように見える。ショートカットの髪型だが、髪先が揃えられているわけではなく、適当な感

じの髪型だった。

奏さんといいこの二人といい、世の中にはこんなにもスローテンポの人間が多いのか。

二人はどちらとも魔術師。つまりは、遠距離型ということだ。

こちららも魔法を使えるので、問題は属性の相性になってくる。

属性の相性は、水 火、火 氷、氷 風、風 土、土 雷、雷 水のはず。

つまり、向こうが水なら、相性としては最悪。逆に土ならば最高。でも、土を使うなら、逆に油断はできなくなる。土の能力増加はまだ見たことがない。

「・・・ちよつと海璃。」

「なんだ？作戦でもあるのか？」

「・・・さっきの話は何処へいったの？ねえ・・・さっきのことって本気」

「嘘だ。」

即答。

「・・・あ、あんたつて人は・・・」

「おい、琴音。そろそろ作戦とか立てなきゃ・・・」

「バツキヤロオー！！！！」

バキッ

「いつてえ！何すんだよ！」

「『何すんだよ』じゃない！そつちこそ何してくれてんのよ！ちよつとでもときめいた心を返せえ！！！！」

「勝手にときめいてんじゃねーよ。ほら、もう始まつてるぞ。」

ビュン

海璃は琴音をかばって横にステップをする。すると元いた位置を水の刃が通り過ぎていった。

「・・・ちつ。水属性か、相性としては一番嫌なやつだな。」

「ちつつちつ。甘いなあ。K A I R I君はあそこそ有名だからねえ。属性くらいならもう広まってるんだよあ。」

「そうなんだ。やっぱり魔法戦士は珍しいのかな・・・」

魔法戦士はついこないだチェックしたところ自分ともう一人だけだった。

ちなみにもう一人の魔法戦士も海璃と同じLv2だった。

まさか、パーティーを組んでいることまでが知られているとは思ってもいなかった。

そして、琴音の属性まで知られているとは。

「とにかく、負けたくはないんで・・・いつちよやりますかっ。琴音っ。」

「・・・あんたってやつは・・・」

(やべえ・・・からかいすぎたかな・・・)

怒りでプルプルと震えながら下を見ている琴音をみながら海璃は思っ。

「・・・まあ。いいか。」

今はそれどころではない。相手は待つてはくれないのだ。

16話

「ちよつと！話を聞けえ！！」

「うわっ！琴音、危ない！」

海璃は琴音の頭を抑えつける。するとついさっきまで2人の頭があつた位置を2つの水の刃が通り過ぎていく。

「ちよつと！何してくれてんの！」

「戦闘に集中しろ。そんなくだらないこと言ってる暇はない。」

「・・・くだらない？これの何処がくだらないって言うの！？あなたの一生を左右する話なの！それにあんたさっきからほとんど攻撃してないじゃない！新技の使い方わかんないわけ！？格好良く言つたってねえ！セリフが行動にともなっていないから！」

「・・・仕方ないだろ。俺の戦闘相手は過去に。お前のような女男と人間のクズだけだったんだし。」

琴音はさっきの事を海璃に迫るばかりで戦いに全く参加しようとしていない。

「だからさ、今更だけど、こんな可愛い子2人も相手にできないし。」

それを聞いた向こうの2人の動きが止まり、互いに顔を見合わせる。

「エへへ。可愛いって言われちゃった。」

「そうだね、エへへ。私も可愛いっていわれちゃったよお。」

お互いに顔を見合わせて「エへへ」と言い合っている。

「・・・ほお〜。それは、あたしはこのブリっ子達よりも可愛げがないと?」

「あう〜。今度はブリっ子だつてえ〜。しょっくう〜」

「ブリっ子かあ。なんでもいいけどミンミンがショックなら私もショックだあ。」

琴音の言葉を聞いて悲しそうな顔をしてMinMinはしゃがみ込む。そして、横に立っていたLielyの方は彼女を慰めるように横に座る。

「ああ。気にしないでこんな乱暴女の言うことなんて。」

「て、てめえ!!! ブッコロス!!! もっぺん言ってみろ!!!」

「ほらほら。そんなんだから『男女』なんて言われちゃんだよ。」

「言ってるのはテメエだあ!」

ビュン

目の前を水の刃が通り過ぎる。

「おっと。」

前を見るとMinMinが立ち上がっていた。

「負けないもん〜。べえ〜だ。特にその口が悪い女の子あ〜。あたしたちもうすぐLv上がるんだもんねえ〜」

舌を出しながら、MinMinは水の刃をうってくる。

「そろそろ頑張りますか・・・KAIRI」

いいながら海璃は武器を作りだすことをイメージする。

```
< Mode / Fighter . . . Tipe / Weapon Cre  
ate . sword . Lv1 . . . OK . . . Start >
```

頭の中に流れる聞きなれた合成音声。しかし、発せられる言葉は初めて聞くものだった。

そして、海璃の右手に光が集まる。

次の瞬間、海璃の右手には日本刀が握られていた。

「使い方が分からなかったわけじゃなくてさ、もしコレが使いづらい武器だったらどうしようかと考えてたわけだよ。」

「あっそ！どうでもいいからそんなこと！・・・そんなことよりあの子、クロス。」

海璃が武器生成をできるようになったというのに琴音の反応は変わらずだった。

「とにかく。このままだと負けるんだよ。」

そう言っつて海璃は琴音の方を見ずに刀を構えて敵に向かって走り出す。

「うわあ。本当に戦士の能力も使えるんだあ〜。でも、こっちも負けないよあ〜」

MinMinはLilyと横に並んだ。そして、右手を銃の形に構え左手を腰にあてて、まるでアニメのキャラみたいなポーズをと

りながら2人は叫んだ。

「ウォーターガン！」

すると、2人の手から水の塊が一気に発射された。

「っ！」

思わず海璃は足を止めた。

(やつべ。流石に避けられないかな・・・)

「海璃！伏せて！・・・ファイアキャノン！！！！ぶっ飛ばえ！！！」

拡散弾のように発射された水の塊と火の玉がぶつかると。

本来、火と水とは相性は悪い。しかし、水の塊は海璃は避けられないようにバラバラに飛んでいたため、1発1発の威力はたいしたことではなく、琴音の方の一点突破の攻撃の方に分があった。

「なっ！なんでえ〜」

「海璃！今！」

琴音が叫ぶ前に海璃はすでに走り出していた。琴音の攻撃で、真正面にだけ水の塊はなかった。

「ははっ！もーらいつ！」

水の弾幕を通り抜け、海璃は2人に迫る。

「っ！」

思わぬ突撃に2人は魔法を発動させれず衝撃に備えて、キュツと目をつぶった。

しかし、2人が思っていた衝撃はいつになっても襲ってこなかった。

「・・・え？」

「これで勝負あったな。物理攻撃は急所に当たればほぼ一撃で決まる。そこで提案だ。引き分けにしないか？」

「・・・どういうこと？」

「取引をしよう。」

ニヤッと笑いながら海璃は続ける。

「こっちが求めるのは協力者だ。かわりにこの勝負をドローにする。」

突然の海璃の申し出に2人は頭の上に？マークを浮かべた。

「つまりは、こっちは情報。そっちは経験値。どう？さつきもつすぐLvが上がるよと言ってたでしょ。それに協力するのは互いに損にはならないだろ。」

いかにも名案というような顔で海璃は言う。

「でも、それじゃあKAIRIさんには損じゃないですかあ？あたし達を倒してからでもいいんじゃないですかあ？」

「流石に倒された相手に情報を与えようとは思わないだろ？」

それを聞いた2人は顔を見合わせて笑った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4595k/>

ダウンロード

2010年10月9日17時46分発行